

## 主体的に学び合う複式教育

～自己の変容を認識できる板書や記録の工夫～

### 1. 研究テーマ設定の理由

#### (1) 学校提案と関わって

今年度の研究主題「学びの質の高まりをめざして」の副題は「自己の変容へとつながる『吟味』」である。

学校提案では、学びは対象・他者・自己と対話することで熟成していく三位一体の活動であると定義している。そして、「吟味を生み出す対話」をつくっていくには、その先に、確かな自己への振り返りがあるか、自己の変容を認識できるような手立てが用意されているかを常に意識して実践をしていく必要があるとしている。

複式教育での「確かな自己への振り返り」「自己の変容を認識できるような手立て」について考えて行くために、まずは複式の学びの特徴について確認したい。

複式教育での学びは、「少人数」「異学年」がキーワードとなる。そして、具体的には下のような点が、特徴として挙げられる。

複式学級では、

- ・一人ひとりの活動の場が十分確保できる。
- ・一人ひとりの発言の機会が多くなる。
- ・異学年の子どもたちから学ぶことができる。
- ・司会や記録など自分たち主体で学習を進める技能や態度を身に付けやすい。

特に、複式学級の学びにおいては、司会と記録を子どもたち自身が行い、自分たちで主体的に学び合い学習を進めていくところに最大の特徴がある。そしてそのために、学習の基本的な流れを確立させて、子どもたちが十分理解し、学習を自分たちで進めやすいようにしている。

本校複式部では、学習の基本的な流れは以下の通りである。

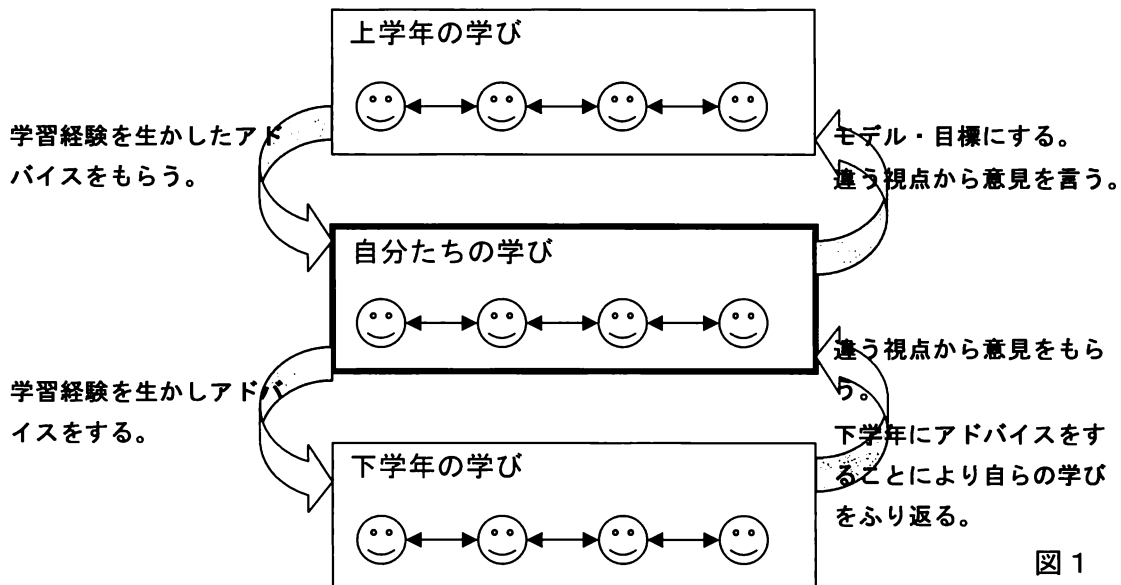
#### 学習の基本的な流れ

1. 学習のめあてをつかむ。（どんな学習をしていくのか見通しをもつ。）  
↓
2. ひとり学びをする。（めあてに従い、課題に対する自分自身の考えをまとめる。）  
↓
3. 全体で学び合う。（個々の考えを出し合い、吟味し、よりよい考えに高めていく。）  
※場合によっては、「ひとり学び」と「全体学び」の間に、ペアや小グループの学びが入ることがある。  
↓
4. 振り返りを行う。（学習を振り返り、自他への認識を更新すると共に、次の学習の課題を再確認する。）

現在では主体的に学び合うために、子どもたち自身が学習の基本的な流れを身につけつつある。しかし、今年度の学校提案にある、「自己の変容へとつながる『吟味』」を複式教育で実現するためには、学習の流れの中での「振り返り」や「評価」のあり方や手立てについてさらに課題を明確にしていく必要がある。したがって、「評価」をキーワードに、学校提案に挙げられている「協同的な学び」と「焦点化のポイント」について述べていく。

#### ①複式における協同的な学び

単式学級では、学び合う仲間は同学年であり、発達段階や学習経験といったものに大きな違いはない。複式学級では、異学年が1つの教室で学ぶことになるので、「異学年との協同的な学び」が存在する。これにより、図1のように複式の協同的な学びはより多様に広がっていくことが期待できる。



複式教育では、学習の途中やまとめのときに、異学年同士が互いの学びの結果を見せ合うことがある。「自己の変容」を認識するためには、こうした学びの機会は無効であると考えられる。

例えば、下学年であれば、自分たちの学び合いによる成果を上学年の1つ高いレベルから見てもらい、学びを修正したり、発展させたりすることが期待できる。これは他者評価による学びと言えるだろう。逆に、上学年の場合には、自分たちでは同質であるが故に気づいていない部分などへの指摘を、下学年の素朴な視点から得る場合もある。また、下学年にアドバイスをすることで自らの学びを再認識する機会にもなるのである。

こうしたことから、複式では、同学年による協同的な学びに加えて、同じ教室で学ぶ異学年との交流や対話を積極的に取り入れていく。このことにより、多様な視点から自己評価や他者評価を行うことになり「自己の変容」を認識していくのである。

## ②複式における焦点化のポイント

学校提案では、焦点化における2つのアプローチが述べられている。したがって、複式でもこの2つのアプローチについて研究を進めていく。

### 【子どもたちが関わりながら、学習計画や学習課題を明確にしていくことによる焦点化】

複式では、子どもたちが主体的に学び合うことをめざしている。そうしたことから、学習計画を立て、見通しを持って学習することは非常に重要である。主体的に学ぶためには、指導者から示された学習課題を受け身で考えていくだけでは不十分である。子どもたちからも課題について積極的に関わりながら、学習計画や学習課題を明確にしていく必要がある。自分たちが学習課題について絞り込むことにより、学びに向かう意識も焦点化されると考えるからである。その際、自分たちで十分に課題を吟味できるには、どのような手立てが有効であるかについて研究を進めていく。ここでも、「異学年の学び」を生かし、両学年の単元構成の内容や時間数をできる限り統一することで、互いに検討しあう機会も設けていきたい。

また、学習計画や課題の決定については、学年の発達段階に応じて、次第に子どもたちの裁量を大きくしていく。学習の過程で常に評価を行いながら計画を進めていき、主体的に学べるようにしていく。

### 【対話が生み出される「わたり」での働きかけによる焦点化】

複式教育では、子どもたち自身が主体的に学んでいく。しかし、子どもたち自身では課題の追求が浅かったり、話し合いの内容が拡散したりしてしまうこともある。そうしたときに、指導者は「わたり」をおこない、直接指導の機会を作る。そこでは、子どもたちの思考の流れに寄り添いながらも、子どもたちを立ち止まらせ、熟考を促し、対話が生み出される働きかけや発問が必要になってくる。そして、その働きかけの機会は単式学級の授業に比べて少ない。だからこそ、指導者は焦点化において、的確な働きかけができるよう一人ひとりの児童に対しての見取りを十分にしておかなければならない。また、指導者が「わたり」をする際に、学習の流れの状況が把握でき、子どもたち自身も学びの高まりが視覚的に認識できるように、子どもたちが作る板書をどう組み立てさせていくかについても研究を行っていく。

## （２）複式でめざす子ども像

複式学級には、1時間の授業で直接指導と間接指導がある。そのため特に間接指導において、子どもたちが自分たちで協力して授業を進め、自分たちで課題を解決していき、自分たちで次の課題を見つける意欲や行動力そして主体性が強く要求される。そのため、複式で学ぶ子どもたちには以下の2つのことが必要であると考えられる。

- ① 子どもたち自身が向上的な自己の変容を実感できる。
- ② 自己の変容へと向かう学びの姿勢を身に付ける。

学校提案にもあるように、子どもたちは「対象」「他者」「自己」との三位一体の対話により学びを行っている。そうした中で子どもたち自身が自己の向上的変容、つまり、「対象」＝「まわりの事物・事象や教材」，「他者」＝「共に学ぶ仲間」，「自己」＝「自分」への認識が更新されていく。このことが学びにたいする原動力となるのである。こうした実感を繰り返すことで、主体的に学んでいく意欲が育っていくと考える。

また、向上的な自己の変容を実感できるためには、自分たちで学び合い、学習を進めていく技能や態度が必要である。具体的には、「物事に働きかけ、疑問を持つ」「疑問の中から課題や目標を明らかにする」「意見や立場の違いを認めながら協力する」「目標に向かって行動する」といったものである。特に、「主体的に学び合う」ということを考えたとき、「主体的に物事に働きかけ、目標を設定し行動できる力」を持つ子どもに育てていかなければならないと考える。学習において、「計画(plan)→実行(do)→評価(see)→改善(improve)」のPDSI cycleを複式の学びで実現できる子というのが、複式部でめざす子ども像となる。

複式教育において主体的に学び合うには、全体で学び合う学習を進める中で「自分たちの学びが学習課題のねらいから外れていないか」ということを常に自己評価しながら進めていくことが求められる。つまり、自分たちの学びが学習のねらいに向かって高まっているかどうかをメタ認知できる必要があるのである。

そして、学校提案にもあるように、学びを振り返り自己の変容を認識するには、単に振り返りカードに感想を書くというだけでなく、学びを可視化する手立てが必要である。

複式の主体的な学び合いでは、その時間の学びの軌跡は、自分たちが中心となって黒板に記録していく内容に現れる。学習課題について互いに吟味したことを、子どもたち自らが書き込んでいくからである。子どもたち自身が記録したものを「可視化された自分たちの学びの軌跡」と意識することにより、全体で学び合う際の学習のモニタリングも可能になり、振り返りにおいても自己の変容を認識することも可能になると考えるのである。そこで、今年度の研究テーマを「主体的に学び合う複式教育～自己の変容を認識できる板書や記録の工夫～」とし、研

究を進めることにした。

## 2. 複式における「学びの質の高まり」

学習集団として、思考の多様性・広がり深まりを生み、「学びの質の高まり」をめざすためには、三位一体の対話が活発に繰り返される必要がある。他者との対話においては、単に意見を述べ合うのではなく、友だちの言葉を取り入れつつ、自分の言葉に置き換えて表現し伝え合うことが大切である。なぜなら、学びを振り返る際、「自分はどのように変わったのか」「それは誰のどのような言葉によるのか」ということを意識して自己と他者の向上的な変容を認識できるからである。

友だちの言葉を取り入れつつ、自分の言葉に置き換えて表現し伝え合う際には話し合った内容を黒板に記録していく。単に、記録係が発言内容を書き取っていくのではなく、全員で話し合いながら記録することを選択していく。こうした過程を経ることで黒板に書かれた記録は可視化された学びの軌跡となる。こうしたことで、自他の向上的な変容を認識することで質の高い学びが成立すると考える。

## 3. 研究の展望

複式の授業では、子どもたちが司会や記録などの技能をもたなくてはならない。発達段階を考慮した具体的な目標を設定し、その達成のための手立てについて研究していく。特に今年度は、研究テーマからも「記録」について具体的な手立てが明示できるようにしていく。

	話す・聞く	司 会	記 録
低学年	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ペアで話したり、聞いたりできる。</li> <li>・みんなに聞こえるような声の大きさで自分の意見を話す。</li> <li>・話し手を見ながら聞く。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・司会の役割を自覚できる。</li> <li>・偏りなく指名できる。</li> <li>・基本的な学習の流れに沿って進行できる。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・適切な大きさの文字で記録できる。</li> <li>・大事な言葉を記録できる。</li> <li>・大まかな学習の流れが分かる記録ができる。</li> </ul>
中学年	<ul style="list-style-type: none"> <li>・似た点や違いを考えながら自分の意見を話す。</li> <li>・自分の意見と比べながら聞く。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・似た意見や違う意見を整理することができる。</li> <li>・学習課題に合った進行ができる。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・意見を簡単に類型化できる。</li> <li>・色チョークや矢印などを使い、大事な言葉を目立つように記録できる。</li> <li>・1時間の学習の流れを意識した記録ができる。</li> </ul>
高学年	<ul style="list-style-type: none"> <li>・視点や論点の広がりやずれを意識し、整理しながら話す。</li> <li>・話し手の意図を捉え、自分の意見と比べながら聞く。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・場や状況を考え、自ら応じ返したり問いかけたりできる。</li> <li>・状況に応じて、臨機応変に進行ができる。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・意見を取捨選択し、必要な内容を関連づけながら記録できる。</li> <li>・出された意見を類型化できる。</li> <li>・反対意見や追加された意見を効果的に書き加え、学びの深まりが分かる記録ができる。</li> </ul>

## 4. 研究の評価

研究の評価については、授業の様子を記録したビデオ・録音・写真、授業記録、児童の書いた文章や図などを通してできるだけ客観的に行う。特に板書については写真で記録しておき、児童の振り返りの記録と照らし合わせながら「可視化された学びの軌跡」が自己の変容の認識につながっているのかどうかを検証していく。

比較については、年度当初と年度末の類似した学習単元で行うものとする。